

フリーダ・カーロと同時代美術 — 《ふたりのフリーダ》の解釈を中心に—

神戸大学
杉前真琴

20世紀前半のメキシコ人女性画家フリーダ・カーロ(1907-1954)は、自画像を中心とする約200点の作品を残した。なかでも代表作《ふたりのフリーダ》(メキシコ市、近代美術館蔵)が描かれた1939年は、メキシコ美術が国際的に大きな注目を集めた時期にあたる。本作品は、カーロの他の作品に比べてとくに大きな画面、シュルレアリスム的な様式、そして主題においても特異な作品であると言える。

しかし先行研究では、作品制作と同時期に夫ディエゴ・リベラと離婚したことから、離別の悲しみや愛の苦悩を題材とする個人的主題の作品であると解釈されてきた。その問題は、社会背景の考察や同時代美術との比較といった美術史的な論証の手続きが厳密にはとられてこなかった点にある。そこで本発表では、この問題の解決を通して、先行研究とは異なる図像源泉となりうる作品を挙げ、主題に関する新たな解釈を提示することを目的とする。

まず、本作品の新たな図像源泉の例として、カーロが通った国立予科学校に描かれた、メキシコ壁画運動の巨匠の一人ホセ・クレメンテ・オロスコによる壁画《コルテスとマリンチェ》(1923-1926年、メキシコ市、現サン・イルデフォンソ学院美術館蔵)を挙げてその関連を指摘する導入として、同時代の社会や美術の諸要素と本作品との繋がりについて考察する。1920年代の壁画運動を推進した公教育大臣による文化におけるナショナリズム形成やその根拠となるメキシコ的主題としての「混血」概念がどのような理念のもとで形成され、壁画に反映されたか、それをカーロがいかにかに受容したかを明らかにする。また、アンドレ・ブルトンがメキシコを訪れた1938年前後に始まるシュルレアリスム運動のアメリカ大陸進出と、カーロやメキシコ美術への評価の高まり、本作品が最初に出品されたシュルレアリスム国際展(1940年、メキシコ市)について分析することで本作品の制作要因を探る。

続いて、先行研究で挙げられたダブル・ポートレイトの構図をとる西洋美術史上の先行作例が図像源泉となりうるかを検討する。そして本作品のモチーフを詳細に分析し、オロスコの壁画との比較を通して、両者に共通する主題の構造、西洋人 - 先住民、男性 - 女性、征服者 - 被征服者という重複する対立概念を浮彫りにし、図像源泉としての妥当性を裏付ける。

結論として、発表者が《ふたりのフリーダ》の主題として提示する新たな解釈は、「シュルレアリスムとメキシコ美術の混血」である。本作品は先行研究で述べられてきたような個人的感情の表現にとどまるものではない。オロスコの《コルテスとマリンチェ》にも表された「混血」というテーマは、メキシコの文化ナショナリズムの形成においてそのアイデンティティの柱となる社会的概念である。この「混血」という主題によって、シュルレアリスム国際展という舞台において「メキシコ性」を表象し、その存在を誇示することがまさにカーロの企図だったのではないだろうか。